



# 二十六聖人

令和2年5月号  
(令和2年4月30日発行)

教会だより

2020.5 No. 325  
(ウェブ版特別号)

カトリック二俣川教会 TEL 045-391-6296  
<http://www.futamatagawa-cc.com/>  
主任司祭：ヤコブ 姜 真 求 (カン ジング)

## 巻頭言 神の御母よ

いよいよ5月になって、私達は新たに聖母マリアの月を迎えました。韓国の5月は1年の中でも一番美しい月として認められ、5月の新婦という言葉があるほどです。この5月が聖母聖月と呼ばれるのは、誰より御子の復活を喜ばれたマリアと共に、全ての信者もその喜びに与ろうという勧告なのだと思います。確かに、聖マリアはイエス様の誕生から十字架の死に至るまで、いつも、イエス様と共におられました。時には人間的な疑いや母としての心配もあったとも思われますが、聖マリアは「お言葉通りになりますように。」という、「アーメン」の精神を失いませんでした。その聖マリアを、イエス様は十字架の上でご自身が愛しておられた一人の弟子にお委ねになりました。彼はその時からマリアを自分の家に迎え入れたと聖書には書いてあります。教会が聖母マリアを自分の母として敬っていることも同様です。信仰のある人である私達もこの世の中で、様々な誘惑に揺らぐかもしれませんが、聖マリアの「アーメン」の精神を失わないことが大事だと思います。

さて、韓国の神学校では5月になると、毎晩、ロザリオが終わったら、運動所にある聖母像の前に全員集まって聖母連願を捧げます。その連願の最後にはラテン語で「Sub tuum」と言われる祈りを唱えます。それは聖マリアの慈愛に私達を任せるという意味の祈りです。全ての母親と同じく、聖マリアは私達の母として、色々な悩みや苦しみの中にいる私達を、そのまま置いておかない方に違いありません。私は中学生の時、レジオ・マリエ(Legio Mariae)の会員として活動した時その祈りを学びましたが、今も、困る時にはその祈りを唱えたりしています。

今、全世界の人々が新型コロナウイルスのためにひどく苦しんでいます。全ての命が脅かされていますが、なかなか、出口が見えません。今こそ、信仰のある私たち一人一人が神様との関係を真剣に顧みて自分自身を改めねばならないと思います。特に、聖母聖月を迎えて、聖マリアにより頼むことも必要です。この病気のため亡くなられた方々や闘病中の人々、医療従事者たち、また、私たち自身のために、神様の慈しみと憐れみを祈り求めるべきです。聖マリアは私たちが助けを求めるとすぐ、必要な恵みを神様に共に祈り求めてくださる方です。その聖マリアの助けを願いながら、皆さんと共に祈りたいという気持ちをもって、「神の御母よ」という祈りをご紹介します。

Sub tuum praesidium confugimus, Sancta Dei Genetrix. Nostras deprecationes ne despicias in necessitatibus, sed a periculis cunctis libera nos semper, Virgo gloriosa et benedicta. Amen.

神の御母よ、私たちはご保護を仰ぎます。いつ、どこでも私たちの祈りを聴き入れ、御助けをもって全ての危険から守ってください。アーメン。(カトリック祈禱書「祈りの友」の中)

We fly to thy patronage, O holy Mother of God; despise not our petitions in our necessities, but deliver us always from all dangers, O glorious and blessed Virgin. Amen.

主任司祭 ヤコブ 姜 真求

## 洗礼を受けられた方々の言葉

主のご復活おめでとうございます！そして、洗礼・初聖体・堅信のお恵みを受けられた方々に心からお祝いを申し上げます。受洗された方々の言葉を喜びのうちに掲載いたします。

### 洗礼式を終えて

大変厳しい試練の中、この度無事に受洗させていただけた事をととても嬉しく思います。ウイルス感染予防の為に教会での公開ミサが長期に渡り中止になるなど、一時は洗礼式もどうなってしまうのかという本当に不安な状況にあって、無事に洗礼と堅信の儀を執り行って頂いた姜神父様を始め、1年間色々教えて頂き大変お世話になった入門講座のヘルパーの皆様、そして長年に渡りサポートしてくれた家族にも本当に感謝の言葉しかありません。

共同体の皆さまと二俣川教会での主日ミサに笑顔でまた参加出来る日が早く実現することを引き続きお祈り致します。ありがとうございました。

ラファエル O. H.

---

この時期に洗礼式を開催して頂いた神父様、受洗する迄の学びのご指導、直前まで様々なお気遣い等入門講座の講師の方々、親身にお世話くださった代母さん、皆さまに感謝の気持ちでいっぱいです。

今の状況では教会の再開の見通しも立たず、今回、お若い方に混ざって受洗させて頂きました。少人数ですが厳粛の内に洗礼・初聖体・堅信を受けることができました。これからは神様のみ旨に沿っていきたいと思います。

先の見えない不安の中、いつの日か明るい兆しが訪れる事を信じ、祈っております。ありがとうございました。

カタリナ ラブレ U. H.



## 信徒の皆さまから

今の閉鎖されたような状況の中で、信徒の皆さまはどんなことを考え、どんな風に生活されているのかを数名の方々にお書きいただきました。

### 公開ミサ中止への信徒としての思い

御復活おめでとうございます。

新型コロナウイルス感染症は、人々に恐怖を与えながら瞬く間に世界に広がり、公開ミサも中止となり、私たち信徒にとって最も重要なご復活祭、更にはその先々までも主を各自でお迎えし、祈らなければならない事態となっています。これまでは教会でのミサに与かることを大切にしていますが、このような状況下、SNSの進歩により様々な配信を受け、主日のミサに与かり、祈りでの繋がりを強く意識できました。特に聖ペトロ大聖堂からの復活祭主日ミサの映像にはその美しさに目を奪われました。



その一方で、「教会に集う」ことを制限された日々の信仰は、時に不安であり、御聖体の恵みを頂けない飢え渴きを感じます。そんな時、ふと長い禁教時代のキリシタンの人々に思いを致します。

先日、今年も庭に野菜の種を蒔きました。やがて花が咲き実をつけ収穫です。実の一つ一つを挽ぎ取る時、私はいつも「神よ、あなたは万物の作り主・・・大地の恵み、労働の実り、私たちの命の糧となるものです」という祈りが思い浮かびます。その頃にはミサも通常に行われていることを願っています。

現在、医療最前線で仕事をされている人々に神様の祝福があります様にお祈り致します。また、私たち信徒のために奉仕してくださっている方々、何よりも姜神父様に心より感謝致します。

神に感謝

セシリア K. R.

### 困難の中の摂理

コロナ・ウィルスが猛威をふるっているため、教会のミサも中止になり、その影響で、キリスト教講座、入門講座なども中止を余儀なくされた。私は毎月6回の講座を受け持っているもので、それらが無くなると、準備をする必要が無くなるため、正直言って「ああ、楽だな！」と感じていた。このウィルスのことを考えると、私は旧約聖書のヨブ記を思い出す。

ヨブという人は、無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭の財産があり、使用人も非常に多く、東の国一番の富豪であった。

ある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。主はサタンに言われた。

「お前はどこから来た」「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩き回っていました」とサタンは答えた。主はサタンに言われた。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」

サタンは答えた。「ヨブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。あなたは彼とその一族、全財産を守っておられるではありませんか。・・・ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらん下さい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません。」

主はサタンに言われた。「それでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には手を出すな。」サタンは主のもとから出て行った。

ヨブはサタンからいろいろな嫌がらせを受けるが、「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」と言って、主を恨むことは一切無かった。

人生はバラ色の時だけではない。灰色もあれば、真黒な時もある。そういう時に、神も仏もあるものかと考えがちだが、そういう時こそ、神も仏もすぐ近くにいて下さると考えられれば、信仰生活は相当に進んでいると言えよう。

ガブリエル S. K.

---

## 祈りと共に過ごした四旬節・聖週間

今年の四旬節と聖週間は新型コロナウイルスの世界的な流行の影響を受けて、教会の公開ミサ中止という、寂しくも厳しい体験を味わう試練の時となりました。私にとってはごく当たり前であった教会生活が実はどれほど有り難い事であったのかと、つくづく思い知らされる機会ともなりました。

そのような時、カトリック新聞を通じて、フランシスコ教皇様の呼びかけを読み、心の開かれる思いがしましたので、少し分かち合いたいと思います。

教皇様は「パンデミックは人類に対する神の裁きではなく、何が一番大切かを見極め今、この時から行動に移していくようにとの神の呼びかけです。イエスに私たちの人生の船に乗っていただきましょう。私たちの恐れを主に委ね、乗り越えさせていただきましょう。主が共に乗っておれば、船は沈まない。これが神の力だからです。たとえ悪い事でも、私達に起こるあらゆることを、良い事に変えて下さるのです。このパンデミックの嵐のただ中で、神は人々に、信仰に立ち返るよう求めていて、その信仰はただ、神を信じるだけでなく、神に向かって神に寄り頼むことです。」と強調されました。

また、ヤコブ姜神父様からのFAX通信の中でありました、主日の聖書朗読と黙想十字架の道行、ロザリオ、主の祈り、アヴェマリアの祈り、栄唱などのおすすめに従って、祈りながら家庭での小さな復活祭を迎えることができました。これからも、日々新たにしてくださる聖霊に信頼して、コロナ禍の終息と苦しむ人々のために、命がけで助け合い支援しておられる世界の人々のために祈り続けてまいります。

しかし、私は時々、様々な情報あふれる中で恐れや不安な気持ちになることもありました。そのような時には、聖霊の息吹を吸い込むようにゆっくりと深呼吸して瞑想し、すべてを主に委ねる、祈りのひとときを持ちました。そして何よりも神の慈しみへの信頼の心を大きくして、復活の主キリストと共に祈れることは、それは、それは、幸いな事であると気づかされたのです。

----- あなたがたには世で苦難がある、しかし、勇気を出しなさい。

わたしは既に世に勝っている ----- (ヨハネ 16. 33)

日本二十六聖人殉教者の聖母、わたしたちのためにおいのりください。

神に感謝と賛美 アレルヤ!

ヨハンナ S. E.

## ミサのインターネット配信について思う

東京教区の菊地大司教は、今回の未曾有の状況に対する教会の立場を明らかにし、また信仰生活を励ますビデオメッセージを何度も発信されています。大司教が強調されているのは、「霊的聖体拝領」です。

実際にミサに与って聖体拝領することは最も重要だが、それ以外の場合、例えば聖体礼拝のミサに参加できない場合でも、祈りのうちにキリストとの一致を求めながら、霊的に聖体を拝領することができる。すなわち祈りを通してご聖体を心の中にお迎えすることで、信仰と愛をもって聖体を受けたいという望みがあれば、聖体の秘跡の恩恵にあずかれるのですと、大司教が分かりやすく説明されていました。

それを具体的に実践するために、東京教区では聖週間とその後の復活節に、カテドラル関口教会から菊地大司教司式によるミサのインターネット配信(以下ネット配信)が行われました。ネット配信が行われたことは日本の教会の中でも特筆すべき出来事だったといえるでしょう。従来であればミサのネット配信には、違和感があるとの声も上がったかもしれません。しかし去年の長崎や東京での教皇ミサのネット配信の実現で、抵抗感が無くなったようです。



動画サイトは、ただ撮影したままではなく、編集や加工を施すと手間がかかります。東京教区のライブ配信には終始、音声とともに字幕が付きましたが、特に演出するわけではなく、ミサの進行に沿ってそのまま淡々と流していました。それだけでも大きな効果が得られたようです。バチカンの大聖堂でもカテドラル山手教会でも聖週間にはネット配信がありました。

プロテスタントの一部の先進的なサイトはSNS宣教といわれ、いま様変わりしつつあります。今後はカトリック教会でもこのようなネット配信によるミサ中継が福音宣教のために多に利用されるのではないのでしょうか。

誰もが映像を作り配信できる時代になり、ネット配信は大変便利なツールですが、だからこそ悪用されるリスクがあります。しかし、このツールを平和の道具として用いれば、情報革命といわれる21世紀に相応しい確かな福音宣教の方法となり得ると思います。

ペトロ B. K.

---

## この異常な状況下で思うこと

「何だか新型のウィルスらしい」とネットやテレビなどで言い始めたのはいつのことだったか、それから毎日少しずつ状況が変わっていき、3月下旬からは日々刻々と悪化していった。

教会に行くことがなくなり、他の自分が抱えている仕事も軒並み延期や中止になると、何だか恐ろしいくらい時間に余裕ができたと感じる。でも、時間があるはずなのに、今の自分は心に余裕がないのではと感じて腹立たしくなったりすることもある。

姜神父様は毎週、本当に心が温かくなるようなお説教を教会HPで発信してくださり、その中でいつも「皆さんの為に祈っていますよ」と言い続けてくださっている。そしてたぶん不安を感じている私はというと、もちろん、聖堂で神父様のお顔をじっと拝見しながらお説教を聞くのではなく、でも、すごく真摯な気持ちになってパソコンの前に座り、お説教を読み味わっている。神父様の言葉の数々には心から感謝したいと思う。前向きな表現をすれば、ネットや教

会 HP のお陰で、私には全く新しい日曜日の過ごし方が始まっているし、きっと他の多くの信徒の方々の日常にも似たような変化が訪れているに違いない。

昨年 11 月、まるで今の状況がわかっておられたかのように、優れた預言者のように、日本に来てくださったフランシスコ教皇様。今にして思えば、『すべてのいのちを守るため』という来日メッセージの何と深く、的確だったことだろう。



今出されている外出自粛を！という強い要請は、ある意味簡単なことだ。家にいればいいのだから。寝る場所があり、ガス電気水道が普通に使える、ゴミもいつも通りに出すことができる。何と幸せなことか。自分の命を守ろうとして責任を持って行動することが、結果として他の方々の為になり、皆の命を守ることに繋がるのであれば、教皇様のメッセージを実践できることになる訳で、これまた信徒としては有難く幸せなことだ。

前向きになろうとしても不安を感じてしまう時は、無理に押さえつけようとはせずに、それこそ時間があるのだから、気分転換をして少しずつ解消していけばいいのだろう。自分との向き合い方、また家族との距離の取り方など、今は学ぶことの多い時期なのだと思う。そして、信徒としてはまず祈ることで皆さまと一緒に前を向いて歩いていきたい。

マリア F. N.

---

## 暗闇の中の光

世界中の教会が閉鎖されてしまったなかでの四旬節とご復活祭。このような事態になるとは、一体誰が想像できたでしょうか。バチカンの聖ペトロ大聖堂で一人懸命にお祈りされていたらしい教皇様のお姿をインターネットで拝見し、昨年来日された際のあの神々しいお姿とは異なり、非常に心が痛みました。

私は教会でのごミサに与れなくなってから、主日は二俣川教会のホームページを開いては姜神父様のお説教を読んでいました。毎週毎週、涙が出るほどに嬉しかったです。同時に、東京カテドラルでの菊地大司教様によるごミサの映像配信を視聴しながら、霊的聖体拝領のお時間を持つことができました。こんなにもインターネットの有難さをしみじみと感じたことはありませんでしたし、特に聖週間においては、菊地大司教様の厳かで 味わい深いお説教に気持ちが非常に強められました。

「日曜日だけのパートタイムの信仰ではなくフルタイムの信仰を」「無関心と利己主義が多くの命を奪っている今こそ、新しい普遍的な連帯を求めていくことの必要性」、そして何度も何度も繰り返し語られていたことが「他者への配慮と思いやり」でした。

世界のあちこちで自国第一主義が蔓延し、更には目に見えないウイルスとの戦いが深刻さを増しながら続くなか、そもそもカトリックとは普遍的という意味であるだけに、共同体としての繋がり、そして離れていても共に祈ることのできる喜びを、私はあらためて幸せと思いました。

また、姜神父様がご復活祭でのお説教のなかで語られた「私達一人一人が愛のウイルスとなって皆のために働く」というお言葉は、ごミサの最後の派遣の祝福のように、まさにご復活の鐘のように、私のなかで鳴り響きました。暗闇の中での希望という光に感謝致しつつ、一日も早いコロナの終息を切にお祈り致します。

クララ Y. A.

今回ご寄稿いただきました方々、お時間のない中ありがとうございました。  
公開ミサが5月30日まで中止となりましたので、来月号でも皆さまの声をお寄せいただければ、思いを共有し、分かち合うことに繋がると思います。締切り日の関係で今回は間に合わなかった方々、下記アドレスに原稿をお送りください。よろしく願いいたします。

広報委員会

koho-new@futamatagawa-cc.com

【編集後記】新型コロナウイルスの感染は瞬く間に世界中に広がりました。自分が感染しているのかわからない、もうすでに誰かにうつしてしまっているのではないかと恐れる日々が続いています。外出自粛という閉鎖的な状況の中、広報では何ができるのかと考えた結果、この『二十六聖人』特別号を教会ホームページに公開することにいたしました。ご自宅で姜神父様のお説教を味わうと共に、『二十六聖人』をお読みいただければと思います。洗礼を受けられた方々の言葉や二俣川の信徒数名の方々の心境を綴った文章を掲載させていただきました。今のこの難関を乗り越える為の一助になればと願っております。

(N. F. 記)